

経済社会学における遂行性アプローチの検討

——ドナルド・マッケンジーの経験的研究を中心に——

東京大学大学院 金信行

1. 目的

本報告の目的は、経済社会学の新たな理論的潮流である遂行性（performativity）アプローチに関して、その代表的論者の1人であるドナルド・マッケンジーの議論に注目して、その内容を明確化することにある。経済現象の成立において学知や道具といったモノ（thing）が果たす役割に着目する遂行性アプローチは、経済現象における社会関係の役割の重要性を説いた「新しい経済社会学」以降の重要な分析視角であるにもかかわらず、必ずしも十分に検討がなされてきたとはいえない。本報告は、マッケンジーによる事例分析に着目して、遂行性アプローチに関して内容の限定を加えることで、今後の経験的研究への応用可能性も検討の射程に入れたものである。

2. 方法

本報告はマッケンジーの経験的研究に着目し、事例を参照しつつ遂行性アプローチの内容を明確化した。具体的には、経済学の遂行性に関して事例と共にその類型を提示した研究（ex. MacKenzie 2007）や遂行性と経済現象の関係について言及した研究（ex. MacKenzie 2017）を検討材料とした。

3. 結果

検討の中間結果は以下の通りとなる。

- 経済学の遂行性については、①一般的遂行性／②効果的遂行性／③バーンズの遂行性／④反遂行性の4類型が存在し、そのなかでもバーンズの遂行性が重要である。
- 遂行性の担い手は経済理論のみに限定されることなく計算装置や運用方法も含まれ、遂行性は技術決定論のような経済現象の担い手による単純な決定論ではない。

4. 結論

以上の分析から遂行性アプローチに関して、何が遂行性を担い、どのように経済現象へ作用するのかが明らかとなり、理論枠組みとしての応用の方向づけへの貢献が期待される。

文献

MacKenzie, Donald, 2007, “Is economics performative?: Option theory and the construction of derivatives markets,” Donald MacKenzie, Fabian Muniesa and Lusia Liu eds., *Do Economists Make Markets?: On the Performativity of Economics*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 54-86.

———, 2017, “A Material political economy: Automated Trading Desk and price prediction in high-frequency trading,” *Social Studies of Science*, 47(2): 172-94.